

刀身を赤らめる

新型コロナウイルスの影響を受ける前のこと、旅先の資料館で興味深い表現に出会った。「日本刀ができるまで」というパネル展示に、「高温で熱して刀身を赤らめる」の一文が。思わず立ち止まって、メモをとってしまった。

動詞「赤らめる」(「(～を)赤くする」という意味の他動詞)を使った文で、「～を」にあてはまる部分、目的語になることばとして、「刀身を」が結びつく例は、珍しいと感じたのだ。

主な国語辞典を調べてみると、「恥じて顔を赤くする」「顔をちょっと赤くする」など、対象を人間の顔色にしぼった語釈のものもあるが、「～を」の部分は限定しない書き方の辞書も多い。ただ、語釈では対象が限定されていない場合も、「恥ずかしさで顔を赤らめる」「ぼっと頬を赤らめる」など、用例で見られるのは、ほぼ「顔」「頬」のみだ。

日本刀関連の本やインターネット記事なども簡単に見てみたが、展示のような作刀の過程の説明で、「赤らめる」を使っている例にはほとんど出会えなかった。多くは、「赤くする」「赤める」「赤熱する」などの動詞が対応していた。この分野独特の用法というわけではなさそうだ。

「刀身を赤らめる」が、単純な誤植だったのか、その地域では違和感のない用法なのか、それとも、「赤らめる」を顔色以外に用いた新しい例のひとつといえるものだったのか、まだよくわからないけれども、以来、気になっている。

そして、「赤らめる」の使い道がほぼ限定されている一方で、「～が」が前につくときのかたち「赤らむ」(「(～が)赤くなる」という意味の自動詞)の場合は、「柿が」「木の実が」「夕焼けで西の空が」など、顔色に関することば以外の例が見られるのも興味深いことだ。いずれ、「赤らめる」にも、「赤らむ」のように、対象を限定せずに用いられるのが自然になる日がくるのか、それともこないのか。

最近、刀を題材としたゲームや漫画が、さまざまな世代の人たちに人気のようなだが、擬人化した数々の名刀が活躍するあのゲームや、使い手と呼応して刃の色を変える刀が登場するあの漫画の世界では、あるいは、「(その身を・刀身を)赤らめる」ということもありうるだろうか。

「赤らめる」が、対象となることばの幅を今後広げてゆくのかどうか、観察を続けるのも楽しそうだ。

本多 葵(ほんだ あおい)